

メルロ=ポンティ・サークル第 25 回研究会シンポジウム「メルロ=ポンティとボーヴォワール」

趣旨

哲学界のジェンダー平等に向けた様々な動きと並行して、歴史上の女性哲学者たちに関する研究も活発化してきている。ブラックウェル社の哲学必携シリーズにおける *A Companion to Simone de Beauvoir* の出版 (2017)、国際シモーヌ・ド・ボーヴォワール学会の『シモーヌ・ド・ボーヴォワール研究』誌の刊行再開 (2019) といった出来事は、とりわけボーヴォワールの著作に関する専門的な研究が充実してきたことだけでなく、彼女のテキストがフェミニスト現象学のような個別の哲学者研究を超えた諸潮流を触発し続けていることをも示している。

仮にそうした研究動向が存在しなかったとしても、メルロ=ポンティの名を冠する学会はボーヴォワールを主題とする十分な理由をもっている。同級生、友人、同志といった実人生上の関係性だけではない。メルロ=ポンティの側では、『知覚の現象学』や『見えるものと見えないもの』といった最重要著作にボーヴォワールからの引用が見られるのに加えて、『意味と無意味』には彼女の小説『招かれた女』を分析した論文「小説と形而上学」が収められている。メキシコ講演やソルボンヌ講義、「制度化」講義などで繰り返しボーヴォワールが参照されていたこともすでに明らかになっている。

ボーヴォワールにも『知覚の現象学』の書評や「メルロ=ポンティと似非サルトル主義」があるだけでなく、サラ・ヘイネマーの *Toward a Phenomenology of Sexual Difference: Husserl, Merleau-Ponty, Beauvoir* (1995) をはじめとする諸研究によって、身体、間主体性、性差といった問題をめぐって二人の間に少なからぬ哲学的影響関係の存在が指摘されている。

本シンポジウムでは、いくつかの主要な論点に関する両者の相互的な影響関係について議論することを通じて、将来のさらなる研究を呼びかけたい。本サークルからは、川崎唯史が道徳や実践などの倫理的な問題について、酒井麻依子が性の問題についてボーヴォワールとの関わりを検討する。ボーヴォワールの哲学研究で知られる杉藤雅子氏には、身体論における両者の交錯について論じていただく。(川崎唯史)

川崎唯史「メルロ=ポンティの実践哲学とボーヴォワール」

『意味と無意味』(1948) の第二論文「小説と形而上学」(1945) は、メルロ=ポンティが明示的に道徳を主題としている点できわめて珍しいテキストである。その内容が『知覚の現象学』の間主体性論および自由論の倫理的展開とみなせることはすでに別稿で論じたので、本発表ではボーヴォワールおよびカミュの思考との関係を考えてみたい。「小説と形而上学」はその大部分がボーヴォワールの最初の小説『招かれた女』(1943) の分析に割かれているが、考察パートにあたる第三節には哲学的エッセイ『ピュロスとシネアス』(1944)

への言及も見られる。また、サルトルによる『異邦人』書評（1943）からの引用という間接的な仕方ではあるが、メルロ＝ポンティはカミュの実存哲学とボーヴォワールのそれを対置した上で後者にはっきりと軍配を上げている。これらの举措がもつ哲学・倫理的な意味について考察することが本発表の具体的な作業となる。

酒井麻依子「『第二の性』を読むメルロ＝ポンティ」

メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』（1945）の性的身体の章は、女性的な身体への考察が欠けているとしばしば批判されてきた。だが、彼は1949-52年のソルボンヌ講義の中で、ボーヴォワールの『第二の性』（1949）を詳細に取り上げることにより、『知覚の現象学』においては不足していた女性の性とセクシュアリティ、性的身体に関する考察を深めようとしているように思われる。周知のように、ボーヴォワールは『第二の性』の中で、サルトルとメルロ＝ポンティの議論を踏まえながら精神分析と史的唯物論を批判することで自らの議論を練り上げる。それを受けたメルロ＝ポンティが主張するのは——同様の発想自体はすでに『知覚の現象学』の頃から見られるとはいえ——ボーヴォワールが退けた精神分析と史的唯物論を狭義の精神分析・史的唯物論とみなし、それに対する広義の精神分析・史的唯物論の立場から性・セクシュアリティについて考察することである。また彼はM・ミードらによるアメリカ人類学の成果を参照することで、ボーヴォワールの議論をさらに推し進め、文化や社会環境から独立した、女性（と男性）の永遠不変の〈本性〉なるものを否定する。本発表では『知覚の現象学』の議論とソルボンヌ講義の議論を確認しつつ、メルロ＝ポンティが『第二の性』をどのように読解し、自らの議論へと昇華したかについて考察したい。

杉藤雅子「メルロ＝ポンティとボーヴォワール 身体をめぐる」

1945年11月の『レ・タン・モデルヌ』に掲載されたボーヴォワールによる『知覚の現象学』の書評に関して発表するが、彼女の発言についての評価はメルロ＝ポンティ・サークルの皆様をお願いしたい。

ボーヴォワールは『第二の性』において、「身体はわたしたちの世界への手がかりであり、わたしたちの投企の下絵である」と述べている（DS I 72）。この視点は、書評の中に「身体は客体ではなく、わたしたちの世界の中でのあり方であり、わたしたちの世界への『投錨』であり、わたしたちが物に対して持つ『手がかり』の集まったもの」（364）という記述があることを考えると、メルロ＝ポンティの身体論からの受容と言えるだろう。

しかし、書評以降の作品である『両義性のモラル』（1947）と『第二の性』（1949）を読んでいくと、メルロ＝ポンティの身体論との相違点も見えてくる。それは重点の置きどころが違っていると言ったほうがいいだろう。ボーヴォワールでは「意味をおびた身体」に重点が置かれている。『第二の性』という女性論の底流にあるのは、身体は意味をおびているという洞察である。